

## 第2報告：梅村先生のLTES批評

Critical Comments on LTES (“Estimates of Long-term Economic Statistics of Japan since 1868”) by Professor Mataji Umemura

尾高 焯之助  
Konosuke ODAKA

### 報告の目的

今日やりたいことは、僕がお話をするというよりは、お手許のメモに（「梅村先生との会話」）書いてあることを中心にして、あるいはそれを基礎にして、むしろ皆さんからいろいろコメントなりあるいは思い出なり、ここは違っているとか、そういうことを言っていたら、そういう議論とか知識を共有したいということでもあります。

いま猪木さんのご報告を伺っていて思ったのですが、日本の「長期経済統計」（long-term economic statistics of Japan, 略称LTES）の監修者のお1人であった梅村先生のLTES関係の業績が、業績リストにははっきりとした形で登場しないということです。〔ここで猪木氏より、「意識的にいれなかった」というコメントが加えられた—尾高〕

それはともかく、今日の僕のレポートは、LTESに関係することが主であります。

さて梅村先生は、猪木さんの所によく電話をおかけになったそうなのですが、一橋で現役の頃、夕方近く4時頃になると、時たまわが研究室においでになりました（同僚の方にはどなたに對してもみなそうだったのかもしれませんが）、かなりゆっくと、よもやま話（主に研究・調査にかかわる話）をなさいました。

そういうときに、自分でもびっくりしたんですが、1970年代から始まって2002年ぐらまでの期間中、先生がおいでになったとき（たまにはこちらから出かけたときもあるかもしれませんが）、お話しくださった内容が非常に印象深かったときや、後で自分で調べたいと思ったような折に書き記したメモが残ってありました。会話の全部がメモに再現できたかどうかは自信がないのですが、メモの中には注目すべき論点がいくつか含まれておりますので、それをいくつかご紹介したいと思います。

先生は、一橋をご退官になってから（南 亮進さんのご努力の結果と理解しておりますが）創価大学に就職なさって、かなり永い間、教鞭をおとりになりました。その後、創価大学をおやめになってからも、ずっと研究を続けておいでになりました。ご研究の成果の一端は、今日齋藤さんからお配りいただいた「梅村又次先生遺稿集」に反映されています。しかし、この遺稿集に反映されている諸問題は、今日お配りした僕のレジュメには含まれていません。先生がわが研究室に

おいでになって交わされた会話は、日本の長期経済統計(LTES)にかかわること、あるいはそれを出発点とする日本経済史、とりわけ徳川時代から明治にかけての先生のご研究と関係がありました。

### LTESの「弱点」

まず、1970年というとかなり昔ですが、「LTESの弱点は、生産統計にある」とおっしゃいました。その中でも、ここにいらっしゃる速水佑次郎さんが係わられた農業生産のデータと工業生産のデータとの問題にお触れになりました。双方共に弱いというのです。

農産高については、大川一司先生とジェームズ・ナカムラ教授との間に論争がありました。それを契機に、速水さんと山田三郎さんが農業の生産統計(特に明治初期の部分)を上方改定なされた。現在の我々はお二人のお仕事を受け継いで使っているわけですが、しかし梅村先生は、改定の根拠があまり定かでないとおっしゃるのです。明治初期の農業統計は、雑穀とかクズ米の生産を十分に反映していないのではないかとか、耕地面積中の焼畑の部分が抜けているのではないかとか、等々のご批判がありました。

篠原三代平先生が推計された製造工業生産については、そもそも明治の初期の原資料があまりありません。だから、そこで使われた統計には資料的な問題がある。その具体的なひとつの理由は、明治政府が株仲間を廃止したために同業組合的な機能がなくなったことだ。で、西陣のような例外を除くと、政府は製造工業の具体的な動向をつかめなくなった。そういう制度的な事情が背景にあったに違いないと言われたのであります。

そこで、今のようなことを討論しているときに、「じゃあ、LTESは改定しなきゃいけないんですね」と申しますと、先生は、それはなかなか簡単にはできないから、あまり焦らないほうがいい、もしやる際には、新しいデータを探してやるとか、地方の新しい資料を探すとかするのがいいと言われた。これを解釈すれば、LTESの作業で主要な材料として使われた(比較的簡単に手に入る)中央政府の統計は大体使い切った。だから、改定するときには、まったく新しい資料なり方法論なりを使わないといけないと暗に含意されたんだと思います。

LTESを推計した頃の思い出は、別にお配りした「アジア長期経済統計データベースプロジェクト」のニューズレターに、梅村先生が二回登場してくださった折のコメントに多少反映されています。「焦らずにやれ、日本の長期経済統計の推計を始めた頃は、自分たちも素人で、何も知らなかった。たとえば、『農商務統計表』があることすら知らなかった」と言っていたらっしゃいます。推計の資料についても、「一橋には、必要な資料がほとんどなかった」というのは少し言い過ぎだと思いますけれども——、少なくとも経済研究所には資料がほとんどなかったのを、野田 孜さんと一緒にリュックをかついで神田の古本街を探し歩いた。最初は古本屋のおやじが、いったい何でこういうものを探すんだろうと不思議に思っていたのが、何をやろうとしているかがだんだん分かるようになって、古本屋の統計書の値段が上がりあがったんだそうです。

そういった関連の話のなかで、明治期の推計や経済史の歩みは松方デフレが1つの契機だった

とおっしゃったと思います。この見解は、その後の日本経済史研究に——梅村先生がそういうことをおっしゃったせいかどうかはわかりませんが——反映していると思います。僕の知っている例では、一橋にいられて博士論文を書かれたアメリカ人の一人であるヘンリー・ロソフスキー（Henry Rosovsky）先生の論文にも、1885年が日本の経済近代化の発端であることを強調したものがあつた。僕の意見では、ロソフスキー先生の書かれた論文の中で一番いいもののひとつだと思つていますが、ここには、期せずして梅村先生と一致した見解が出てるように思つた。

### 学際的視野

梅村先生は、徳川時代の研究をなさったり、考察なさったりするときに、経済史だけではなく、文化人類学とか経済地理学とか、かなり広範囲の分野を訪ね歩いて、それらの書籍を注文してお求めになり、丹念にお読みになったなかから沢山のヒントを得られ、そのうえでご自分の考察を展開されました。その考察の特徴が、尾高メモ（「梅村先生との会話」）に載っている（1979年5月付け）の書籍のリストにも現われていると思つた。

### エネルギーと運搬：LTES 弱点克服のために

先ほど申しましたように、先生によれば、明治の初期の日本の経済統計には、推計せざるを得ないサービス産業はもちろん除外としても、データがしっかりしているはずの農業や鉱工業でも、いろいろ問題がある。これを認識したうえで、じゃあどうすれば問題が解決できるか。

この観点に立ったとき、先生が目をつけられたのは、エネルギーの調達と交通・運輸・運搬とでした。とりわけエネルギーがポイントだということを強調されました。明治の初期には、ご案内のように、山村が荒廃した。森林がたくさん伐採されて、それを回復するのに時間がかかった。もともと、かなり一所懸命努力した結果、比較的短期間に回復したと言つていいと思つた。ともかくも、工業化を始めるにはエネルギー源が必要なのに、石炭が広範に使われるようになる以前には薪を使わざるを得なかった。山林が荒廃した。もちろん薪だけでなく、水も含めて、エネルギーに注目することが大事だとおっしゃった。

それから、運輸。たとえば、道路網を張り巡らすとき橋をどこにどういうふうに架けたとか、そういうことが大事だと言われた。これは、『遺稿集』でも、交通の問題には最後まで強い関心を示しておいでになるところにつながっています。

速水 融さんが昔からおっしゃっている徳川期の「勤勉革命」との関係で、日本では牛馬があまり使われなかったという見解についても、コメントがありました。これは鬼頭 宏さんのご研究とも関係ありますけれども、日本では、牛馬は農耕用よりはむしろ運搬用に使われたのではないかと。ところが明治期には、山林が荒れて飼料が足りなくなったために、牛馬を簡単には飼っておけなくなった。それはともあれ、先生によれば、日本の牛馬はヨーロッパの牛馬と違って小さいから、あまりたくさん食わなかつたろう。したがって、牛馬飼料としての植物の栽培量（収穫量）は、もしかすると過大に評価されているかもしれない、ともおっしゃったのです。

## 満点はつけられない産業政策

明治期になって産業政策が始まって以降については、殖産興業政策の効果分析はまだ誰もちゃんとやっていないのではないかと(ただし、1983年段階での評価ですが)、とりわけ地方の産業活動は、徳川期の藩の国産奨励活動の続きだとおっしゃっています。これは、現在では、日本の経済史家のかなり共通の見解になっているのではないかと思います。

この点と関連しておもしろいと思いますのは、地方の殖産興業活動は、徳川期から明治に入っても続いたわけですが、これが政友会の活動に引き継がれ、さらに現在に至るまで、類似の動きとして存在するんだというのが先生の解釈です。現在の段階で、改めてこの梅村先生の見解を振り返ると正しいかどうか、おもしろい検討課題かもしれません。

ところで、明治の、特に明治初期の中央指令型の政策はだいたい全部失敗だったとも、はっきり言っておいてになる。これは、現在ではどういうふうに評価される見解なのでしょう。明治以前の地方中心の産業政策が、だんだん中央指令型に転換して現在に至っていると言えるかと思えます。ところが、明治期の中央指令型の政策は、銀行と鉄道と電信以外は大体失敗したというわけです。注目すべき評価だと思います。

## 空白の四半世紀、明治初期の地方鉄道、そして菌のボトルネック

1984年の最初の尾高メモは、なぜこの記録があるのかあまり定かではありません。たぶん QEH のコンファレンスか何かがあって、そのコンファレンスでの先生のご感想だったのか、あるいは、僕がコンファレンスの感想を言ったのに対して先生が反応されたのかもしれませんが、いくつかのコメントをおっしゃって、その中に猪木君も登場するので、猪木さんはたぶん何か報告をされたのだらうと思います。

まず地方の鉄道について。これは、さっきの鉄道に関する強いご関心の文脈の中で考えられたことだと思いますが、鉄道は、地方の名望家が関係して敷設されたことが多いけれども、実際にはうまくいかなかったケースのほうが多いとおっしゃった。なぜなら、政府の中でも民間でも、地方鉄道に関してはいろいろな対立があった。だから、もうちょっと内部の事情をフォローしたらいいんじゃないかというご意見でした。

1984年のメモは、かなり手広い範囲にわたっています。金融とか、松方デフレの効果とか、あるいは経済史における時代分割(ピリオダイゼーション)の問題だとか、さらには生産一般に関しての先生のコメントを伺っています。

金融に関しては、無尽だとか倉庫業が大事である、とのことでした。これを受けてかどうか、寺西重郎さんのご研究の中に、倉庫業の重要性に関する指摘があると思います。

ピリオダイゼーションに関しては、安政以後の25年間の研究がブランクである、と、この見解は、数量経済史研究会(QEH)に引き継がれて、その後「空白の四半世紀」という標語のもとに展開された研究活動に、たぶんつながっているのでしょう。

この年には、1970年代の議論の続きで、LTESに関するコメントを改めて伺っています。特に84年4月のメモで注目されるのは、米穀金融についてのコメントです。すなわち、当時は大蔵省が食糧管理局を兼ねていたが、米価維持が必要とされたために米を輸出した時期があったという説明を試みておられます。

1984年7月26日のコメントには、繭のボトルネックは桑だけれども、桑の供給にはタイム・ラグがあって、4～5年すればもとの状況を回復出来る。その点にも配慮すべきだと言われております。要するに、蚕糸業の生産の分析をするときに、桑のボトルネックが4～5年で回復することも考慮に入れてやれということです。

ところで先生によれば、自給自足の状態から商品生産の段階に入るのは、文政から天保の時期以後なのではないか。というのは、その頃から産地間競争が出てくる。産地間競争は、さきほど触れた「地方の時代」に関連して、(当時の学会の状況から判断すると)もっと注目するほうがいいとおっしゃっています。ちなみに、これと関係して、「越中の生産」という資料がある。ここには農業を中心とする付加価値のデータがあるから、ぜひ十分に検討してみるといいと勧められたことがありました。この情報は佐藤正広君にお伝えし、佐藤さんがこれを使って『経済研究』に論文を書かれたことがあります。もっとも、佐藤正広さんが分析した結果から判断すると、梅村先生が期待されたほどの資料ではなかったという印象はありますが。

#### 錢不足ならびに労働慣行をめぐって

メモの最後では、さきほど触れた「空白の四半世紀」には、データが空白であるだけでなく貨幣制度上でも大きな混乱があった事実を指摘しておられます。メモには書いてありませんけれども、先生が強調なさったのは、明治の初期には地方で(特に日本海側で、とおっしゃったと思います)錢が不足した。そのために景気が悪くなった。貨幣面での混乱は非常に重要であるから、注意しないといけない。

もっとも、経済統計の推計作業の観点から言くと、空白のこの混乱期は、さしあたりはバイパスして、その前後を埋める努力をするほうがいいとのことでした。アジア長期経済統計のニューズレターに掲載された問答の中でも、「自分には、この空白の四半世紀というのはどうしてもわからん。わかろうと思ったけれども、わからない。これをどう突破したらいいかと考えたのが、徳川時代の文献を読んだり徳川時代について深く考えるようになったきっかけなんだ」という、打ち明け話がありました。

なお、空白期と関係して、徳川期から明治への労働関係の問題をめぐって、雇用形態(年季奉公とか日雇い)の問題と土地の問題(たとえば土地抵当とか小作の問題)との関連はきわめて深い、年季奉公の概念もこの関連でとらえられるべきかもしれないと言っておられるのは、自分の現在の関心事からしても、もう一度考えてみる価値があるかと思えます。

## まとめ

このように、梅村先生は多くのことを話されたのですが、これをまとめれば、僕の研究室においてになった先生がおっしゃったことは、LTESに端を発して、徳川から明治にかけての日本経済史を巡る理解の空白をできるだけ埋めようとする努力の現われである。そこから始まった考察、読書から得たアイデア、印象などをたくさんお話しくださったと思います。

先生のお話に対して、反論したり再確認することはあまりありませんでした。ちなみに、さきほど申しましたように、LTESのひとつの弱点は生産のデータにあるとおっしゃったんですが、そのご意見がその後も変わらなかったかどうかは必ずしもはっきりしません。しかし、雑穀やクズ米が農産高に十分考慮されていないというご意見は、最後までお持ちだったように思います。この欠陥を改定するなり克服するためにはどうすればいいかという問いかけが、先生の学問的関心が日本経済史に傾斜していった大きな理由だったのだらうと思います。徳川期は地方の経済活動が重要だったから、地方の経済発展や産地間競争についても研究することが必要だとおっしゃったのもその一つの現われでしょう。

さっき猪木さんは、先生には何回も叱られたと言われました。僕もひとつ、これはまったく降伏するほかなかったのは、先生がおっしゃるには、「自分はいろんなことをお前に教えたりサジェスションしたりするけれども、お前から教わったことはひとつもない」(笑)。これは、実に参りました。この点は、最後まで挽回できなかったと思います。ともかく先生には、たくさん、たくさん教えていただきました。